

「学問と社会のあり方研究会」 第9回研究会 2008年2月6日

「地球研に今、もとめられること?」「社会のなかの地球研」をキーワードに、21世紀型の組織活動に転換を」

話題提供：桃木暁子（日本科学技術ジャーナリスト会議理事）

質疑応答記録

Q： 社会との関わりが大事ということはわかるが、地球研の研究者には研究に特化していて、社会への発信といわれてもどうすればよいのか分かっていない人が多い。

A： それは研究者の世界全体の問題で、今までの流れから急に変わることはむずかしいだろう。サイエンス・カフェなど、アウトリーチの場にだれかが研究者を引っ張りだして、そこで経験を積んでもらうなどの対策が必要だろう。そのような場をつくること、そこに参加することが大事。

Q： 地球研の所員は研究成果をあげて研究者コミュニティにまずインパクトを与えるべきで所内の活性度はまずそこで変わってくる。社会への発信は、研究成果をインターブリートする人が専門で行えばよいのではないか。

A： 所員一人一人が自分の研究成果をどうするかということとは別に、研究所としてプロジェクトの成果を社会に伝えることを重要と考えるのであれば、コミュニケーターのような人を置いたり、プロジェクトの人員の一部をそれに充てたりするなど、そのための体制を整える必要があるのではないか。

C： 地球研の人々は一般に社会への発信に対するやる気も素地もあるが、今のところ仕組みがうまく考えられていないのが問題なのではないだろうか。研究推進戦略センターは理念上そのような機能を満たしていると思うが。

A： 制度としてはそうかもしれないが、内容は今後、充実させていく必要があるだろう。それに、広報とサイエンス・コミュニケーションは違う。広報は地球研として行う宣伝活動で、それはそれで重要だが、広報は研究成果を伝えることとは限らない。今、問題にしているのは、地球研の研究の内容を本当の意味で社会にどう伝えるか、つまりサイエンス・コミュニケーションのことである。個人的には既実践している人もいるが、問題は、研究所としてそのような認識が希薄なことである。

Q： サイエンス・コミュニケーション、あるいは研究者と市民の対話は、独立行政法人化

したことで制度的にも必然のものとなってくると思うが。

A： 制度ができて、まだそのような意識になっていない人が多い。

C： 研究者には現在、業績も上げつつ、社会サービスもすることが求められる。プロ野球のファンサービスに例えていうならば、打率が高いだけではだめで、そのうえにファンサービスもしないとファンはよりつかない。つまり、そのような人が集まりやすい環境を作ることこそ大事だと思う。

C： 統合知の意味するところは、結局様々な問題の解決に向けて多様な分野の人材と知を動員することのできるコーディネータ能力ではないかと思う。地球研はそのようなリーダーを養成する組織であるべきだと思う。インタープリターを増やせばサイエンス・コミュニケーション能力が高まるかということ、実際は玉石混交で難しい。研究をした人でないと研究の本当の意味がわからないところも多分にある。

A： 地球研でコーディネータ能力が重要という意見には同感だ。また、現在、文科省が多額の予算を充ててサイエンス・コミュニケーターやインタープリターの養成を推進しているが、将来その成果がどのように活用されるのか、現時点でまだ予測できず、難しい問題だ。

Q： 地球環境問題の研究に対して、最初の取組として概念ありきというのは良いのだろうか。具体的な問題への対処を通してでないとうからない部分が多分にある。プロジェクトは現場主義でこそ成果を上げられるものでもあるので、地球研の統合知というような抽象的で高位の概念が本当に必要なかどうか疑問である。

C： 地球研で戦略的に次のプロジェクトを決めるときに、全体の流れを見ながら判断をすることは大事。統合知は学問的基盤ではなく、そのような対処力と見た方がいいのではないか。

C： 外部から見ていると、地球環境問題という長期的な問題に対し任期制で取り組むことは矛盾しているように思える。日文研の取組や成果はわかりやすいが、地球研の成果はわかりにくい。わかりやすい成果を示さないといけない。

C： 任期制は地球環境問題に対しスピードを持って対処しないと山積の課題に対処できないというポジティブな意味が込められている。大型の予算がついているため、人事を固定すると利権などの問題が生じるという側面もある。

C: サイエンス・コミュニケーションはこれから質が問われる。質を保証するためにどう貢献すべきか。ファンを喜ばせるためにはそれなりの質がないといけない。現在、新しい知識はインターネットなどを通じて急速に普及するので、科学者コミュニティで認められる最先端の成果を出さないと、社会的に意味がないのではないか。伝えるべき知識の質を高めるための取組みが最も大事なのではないか。

A: 研究者と一般の人々が直接、向き合うアウトリーチの場では、伝わるのは学問的「知識」だけではない。研究者にとってみれば、ふだん接している研究者仲間とは異なる一般の人々がどういう反応をするかを知ることによって、視野を広げることができ、一般市民にとっては、学問研究者がどういう考え方をしているのか、を知ることによって学問研究に対する見方を広げることができる。このような、人と人との対話を通じた、認識の共有が最も重要である。知識を得るだけなら、インターネットのほうが効率がよいだろう。

Q: プロジェクトの成果発信を担当するポジションで実際に取り組んだ一人としての意見を言わせてもらおう。プロジェクトの成果を教材にするという、教材づくりを担当したが、この活動にプロジェクト全体の三分の一の研究者の参加を得た。初めての取組みだったが、関心のある人の協力で広がりを見せた。結果的には、アウトリーチがそれほどコストの高いものとは思えない。プロジェクト単位で取り組む分には、それほどコストはかからない。

C: 研究者をプレーヤーとすると、今はコーチやマネージャーが本当に大事な時代になってきたのではないか。

C: 研究機関/研究者が研究を第一の活動として、研究界で成果を上げるのは当然のことだが、今は、それだけでは十分とはみなされなくなっている。さらに社会との関わりをどうするか、ということ考えなければならない。